様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １９ 日現在

機関番号：１１１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３７０３０８

研究課題名（和文）ニュージーランド文学における共生を鍵とした文化的対話の弁証法

研究課題名（英文）Dialectic Dialogue in New Zealand Literature Focusing on Co-existence

研究代表者
澤田　真一（Sawada, Shinichi）

弘前大学・人文社会科学部・准教授

研究者番号：３０２５０６２４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：ニュージーランドの平和・共生の思想形成に、文学は大きな役割を果たしてきた。20世紀初頭から、社会に対する様々な問題提起を行ってきた白人作家たちに、1970年代から著作を開始するマオリ作家たちが返答する。本研究は、文学を通じての両者の文化的な対話の内に、弁証法的な発展を読み取る試みである。白人作家を代表するキャサリン・マンスフィールドが創始した、社会的な境界線を消し去ろうとする「命の文学」を、マオリ作家を代表するウィティ・イヒマエラが、マオリの「マウリ（命の原理）」の概念と結び付け、どのように継承し、発展させていったのかを軸にして、ニュージーランドが共生社会を構築していった過程を明らかにする。

研究成果の概要（英文）：Literature has been playing an important role in constructing the thought of peace and co-existence in New Zealand. Pakeha writers have tried to point out social problems from the early 20th century and Maori writers started to respond to them in the 1970's. This research tries to observethe dialectic dialogue between the writers. Katherine Mansfield can be seen as the founder of the literature of life, which was connected to the concept of mauri (the life principle) and developed by Witi Ihimaera.

研究分野：英文学、ニュージーランド文学、マオリ文学

キーワード：ニュージーランド文学　マオリ文学　ポストコロニアル文学

１．研究開始当初の背景

カナダ、オーストラリアのポストコロニアリズムについての研究は盛んであるが、ニュージーランドの、しかも先住民族の視点を取り入れた研究は歴史が浅い。

白人とマオリのそれぞれのナショナリズムを超えて、多文化主義に至る思想を文学テキストの中に見出す研究はまだ十分な蓄積がないのが現状である。

２．研究の目的

本研究は、イギリスの旧植民地としては例外的に、世界平和度指数（GPI）において常に上位を占めてきたニュージーランドが、いかにして先住民族マオリとの民族問題を克服し、多文化・多民族が共生できる社会を構築してきたかを、主に文学のテキストの解読とインタビューを通じて究明することを目的とする。

３．研究の方法

小説は美的作品であるのと同時に、特定の社会的力関係の中で作り出された生産物であるというポストコロニアル文学批評の見地に立ち、本研究で取り上げる作家の小説をテキストの読みだけではなく、現地での作品舞台の検証と作家への取材を通して解読していく。

４．研究成果

(1)ポストコロニアル文学の社会的機能

マオリは語りを始める前に「ティヘ・マウリ・オラ」という挨拶の言葉を述べる。この意味は「命の息を吸い込んで生きたものとなれ」であり、マオリにとっては「語り」が聞き手に対して命の息を吹き込む行為であることを示している。「語り」とは、森の神タネによって始められた、命の授与という神話的な贈与行為の再現なのである。マオリ文学は、文字を用いた「語り」である。マオリ文学には命が宿っており、その命を読み手に与える。

ウィティ・イヒマエラは 2007 年出版の短編集に収録された「エリザベス・コステロに会って」の中で、伝統的な英文学とは異なるマオリ文学の特徴は、その抒情性と命の肯定にあると言い、破壊的で被植民者に文化的・精神的・霊的な死をもたらしてきた白人の文学を糾弾した。彼が何度も証言しているように、英文学作品はマオリの若い世代にマオリ文化を白人文化よりも劣ったものとして軽蔑させ、白人社会への同化を促すために、学校教育の現場で利用されてきた。しかしながら、イヒマエラはキャサリン・マンスフィールドのうちにマオリの伝統に通底する「命の文学」を見出している。

一族の系図（ファカパパ）を重んじるマオリ文化の中で生まれ育ったイヒマエラは、ニュージーランド文学の系図の始まりに、マンスフィールドの『前奏曲』を据えた。それは、彼の信じる文学の使命を、マンスフィールドが創造したキザイアという少女が体現しているからである。マンスフィールドとの強い絆を意識したイヒマエラは、彼女の生誕 100 周年に合わせて 1989 年に短編集『ディア・ミス・マンスフィールド』を出版した。マンスフィールドは、マオリが登場する作品の中に、マオリに対する問いを忍ばせている。例えば、「いかにしてパール・ボタンは誘拐されたか」の中で主人公の少女パールはマオリ女性たちに対して「あなた方にはつらいことはないの」と問いかける。彼はマンスフィールドの作品に対する「マオリからの応答」として、その続編「心優しき誘拐者」を書いてその問いに答えた。さらに彼女の短編「人形の家」の続編「洗濯女の子どもたち」を短編集の締めくくりに置いて、命の文学の継承者としての立場を鮮明にした。

ポストコロニアルな状況において、文学はどのようにその命を読み手に与えることができるのであろうか。マオリ文学と白人文学の担い手たちは、様々な答えを提供する。

ガヤトリ・スピヴァクは、ポストコロニアルな状況を「強姦から生まれた子ども」と呼んだ。『ウオリアーズ三部作』で知られるマオリ作家アラン・ダフは、小説『月の両面』においてマオリと白人の混血の存在について深く思索し、どちらでもあるとともに、どちらでもないユニークなアイデンティティを肯定した。

ブッカー賞受賞作家ケリ・ヒュームは受賞作品『ボーン・ピープル』において、マオリと白人の不安定な共棲状況こそから、「何かしらあやうくも新しいもの、未知であり、成長する大いなるもの」が生まれうるとした。

イヒマエラは、多文化主義国家ニュージーランドの共生のモデルとして「人間の縄」を提案した。多種多様な色、素材、太さ、質感の無数の糸が撚り合わされて、一本の縄となる。マオリの糸だけでなく、やがてはそこに白人の糸、移民の糸が加えられ、新たな糸が加わるたびに、「人間の縄」はより強く、より太く、よりしなやかになって命の輝きを増していく。

2006 年に『ミスター・ピップ』で英連邦作家賞の最優秀賞を受賞した白人作家ロイド・ジョーンズは、多文化主義の中から「すでにあるイメージに囚われない、何か新しい世界が」創造されうるとした。

ニュージーランドのポストコロニアル文学は、世界は多様であるという現実に正面から立ち向かい、その多様な生と世界を肯定する力を持つような思想を生み出そうとする文学であり、イヒマエラを筆頭とするマオリ人作家たちは、同化政策への抵抗、マオリの権利回復運動という父親的白人文化への抵抗を通じて、新しい価値観、新しい考え方を提示しようとしている。マンスフィールドの

命の文学は、マオリ人作家によって受け継がれ、今それは若い白人作家たちによって継承されようとしている。

(2)命の文学の系譜

キャサリン・マンスフィールドから「命を与える文学」の伝統を受け継いだマオリ文学の第一人者であるウィティ・イヒマエラは、『クジラの島の少女20周年記念版』(2007年)の後書きに、「家父長制と私とは昔から敵同士である。家父長制は私の全作品を貫く主要なテーマの一つである。人種、国家、階級、ジェンダー、性的指向の問題は、住んでいる世界がどこであろうと、人間の公正、平等、正義に対する権利を制限すべきではない」という声明を載せた。これらの言葉は、彼がポストコロニアル研究の著名な思想家として真っ先に名を挙げるパウロ・フレイレが『被抑圧者の教育学』で展開した「人間化」の思想と共鳴する。人間は自らの潜在可能性を発展させることによって、より豊かな人間になるという使命を持つ。イヒマエラの課題は、文学を通じて個人の才能の発現を妨げる様々な力と闘い、抑圧されている者を解放することである。それゆえに新しい文学の価値は、それが抑圧されている人々の心に届く言葉と、命を与える力を有しているかどうかにある。

先述したようにスピヴァクは、植民地主義という暴力を潜り抜けた世界としてのポストコロニアルな状況を「強姦から生まれた子ども」と呼ぶ。イヒマエラの作品の中にひとつの思想的課題として繰り返し現れる主題に「レイプから生まれた子ども」がある。既婚のマオリ女性が白人男性にレイプされて妊娠する。彼女たちのあるものは一人で、またある者は夫とともに悩み苦しんだ末に、子どもをおろすのではなく生むことを選ぶ。

2000 年に出版された劇作品『彼方を歩む女』では、1840年のワイタンギ条約締結以降の大きな歴史(土地戦争、マタフェロの虐殺、ナタパの虐殺、第一次大戦後のインフルエンザ災禍、スプリングボック事件)が女性の目から捉えられ、それに翻弄されてきた彼女の家族の小さな歴史との関連で語り直されていき、誰からも誕生を望まれなかった「レイプから生まれた子ども」が、物語の中でマオリと白人の混血というニュージーランドの第三の部族を率いる原型的人物としての新たな地位を獲得する。

「レイプから生まれた子ども」の受容をめぐる思想は 2005 年の『人間の縄』においてさらに深められる。「人間の縄」は、マオリの提案するニュージーランドの新たな国家アイデンティティのことを指している。また、2007年出版の短編集『家の柱に訊ねよ』所収の「メディシン・ウーマン」においても生まれてくることを望まれない子どもの生と死をめぐる駆け引きが展開される。この作品には、主人公が拠り所とする行動原理が示されており、それはそのまま命の文学の作家論としても読むことができる。

文学とは贈与行為である。作家は言葉を材料として作り出した作品を媒介にして、自らの命を読者に与える。命の原理は、他者の受容、他者との共生が困難な状況においても、「死」、「殺し」という選択肢を放棄して「命」を選ぶことを説きすすめ、良き想像力を駆使することで両者が生き延びるための方途を探り求めようとする。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　２　件）

①<u>澤田真一</u>、ウィティ・イヒマエラと命の文学、オーストラリア・ニュージーランド文学論集、査読なし、2017、pp.207－223

②<u>澤田真一</u>、ニュージーランド文学におけるポストコロニアル・アイデンティティの形成、日本ニュージーランド学会誌、査読有、21巻、2014、pp.3－13

〔学会発表〕（計　３　件）

①<u>澤田真一</u>、ニュージーランドから学ぶ共生の作法、弘前大学人文社会科学部国際公開講座 2016、弘前大学(青森県弘前市)、2016/11/3

②<u>澤田真一</u>、ポストコロニアル文学の社会的機能－生き延びるための思想と文学、オーストラリア・ニュージーランド文学会秋季大会、弘前大学（青森県弘前市)、2015/11/7

③<u>澤田真一</u>、Witi Ihimaera and the Literature of Mauri、New Zealand Studies Society – International Symposium, Auckland Institute of Studies St. Helens, Auckland, New Zealand, 2014/8/31

〔図書〕（計　　件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
　澤田　真一　（SAWADA、Shinichi）
　弘前大学・人文社会科学部・准教授
　研究者番号：30250624

(2)研究分担者
　　（　　）

　研究者番号：

(3)連携研究者
　　（　　）

　研究者番号：

(4)研究協力者
　　（　　）